

[A年]受難節第3主日(2021年3月7日)**【旧約聖書日課】ヨブ記1章1～12節**

1ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。2七人の息子と三人の娘を持ち、3羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。

4息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた。5この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした。

6ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。7主はサタンに言われた。

「お前はどこから来た。」

「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。

8主はサタンに言われた。

「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」

9サタンは答えた。

「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。」

10あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。11ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちががありません。」

12主はサタンに言われた。

「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。」
サタンは主のもとから出て行った。

【使徒書日課】ペトロの手紙一4章12～19節

12愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。13むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。14あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。15あなたがたのうちだれも、人殺し、泥棒、悪者、あるいは、他人に干渉する者として、苦しみを受けることがないようにしなさい。16しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。17今こそ、神の

家から裁きが始まる時です。わたしたちがまず裁きを受けるのだとすれば、神の福音に従わない者たちの行く末は、いったい、どんなものになるだろうか。

18「正しい人がやっと救われるのなら、

不信心な人や罪深い人はどうなるのか」

とされているとおります。19だから、神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書16章13～28節

13イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。14弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」15イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」16シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。17すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いです。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。18わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てて。陰府の力もこれに対抗できない。19わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」20それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

21このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。22すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」23イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」24それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来た者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。25自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。26人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。27人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。28はつきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

ヨブ記1章1～12節

1ウツの地にヨブという名の人があった。この人は完全に、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけていた。2彼には七人の息子と三人の娘があった。3また、彼は羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百頭、雌ろば五百頭の家畜を持ち、僕も非常に多かった。この人は東の人びとの中で最も大いなる人であった。

4息子たちはそれぞれ自分の日に、その家で祝宴を催し、使いを送って三人の姉妹たちをも呼び寄せ、食事を共にするのが常であった。5その宴会が一巡りする度に、ヨブは使いを送って子どもたちを聖別し、朝早く起きて、彼らの数に相当する焼き尽くすいけにえを献げた。「もしかすると子どもたちは罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。

6ある日、神の子らが来て、主の前に立った。サタンもその中に来た。7主はサタンに言われた。

「あなたはどこから来たのか。」

サタンは主に答えた。

「地を巡り、歩き回っていました。」

8主はサタンに言われた。

「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全に、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。」

9サタンは主に答えた。

「ヨブが、理由なしに神を畏れるでしょうか。」

10あなたは彼のために、その家のために、また彼の所有物のために、周りに垣根を巡らしているではありませんか。あなたが彼の手の業を祝福するので、彼の家畜は地に溢れています。11しかし、あなたの手を伸ばして、彼のすべての所有物を打ってごらんください。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」

12主はサタンに言われた。

「見よ、彼のすべての所有物はあなたの手の中にある。ただし、彼には手を出すな。」

サタンは主の前から出て行った。

ペトロの手紙一4章12～19節

12愛する人たち、あなたがたを試みるために降りかかる火のような試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、驚き怪しんではなりません。13かえって、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ち溢れるためです。14キリストの名のゆえに非難されるなら、あなたがたは幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。15あなたがたのうち誰も、人殺し、盗人、悪を行う者、あるいは、他人に干渉する者として、苦しみを受けることがないようにしなさい。16しかし、キ

リスト者として苦しみを受けるのなら、恥じてはなりません。かえって、この名によって神を崇めなさい。17なぜなら、裁きが神の家から始まる時が来たからです。私たちがまず裁きを受けるのだとすれば、神の福音に従わない者たちの行く末は、いったい、どうなるでしょうか。

18「正しい人がかろうじて救われるのなら、不敬虔な者や罪人はどうなるのか」

19ですから、神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねなさい。

マタイによる福音書16章13～28節

13イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子を何者だと言っているか」とお尋ねになった。14弟子たちは言った。「洗礼者ヨハネだと言う人も、エリヤだと言う人、ほかに、エレミヤだとか、預言者の一人だと言う人もいます。」15イエスは言われた。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」16シモン・ペトロが答えた。「あなたはメシア、生ける神の子です。」17すると、イエスはお答えになった。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、天におられる私の父である。18私も言うておく。あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てよう。陰府の門もこれに打ち勝つことはない。19私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる。」20それから、イエスは、ご自分がメシアであることを誰にも話さないように、と弟子たちに命じられた。

21この時から、イエスは、ご自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。22すると、ペトロはイエスを脇へお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」23イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは私の邪魔をする者だ。神のことを思わず、人のことを思っている。」24それから、弟子たちに言われた。「私に付いて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。25自分の命を救おうと思う者は、それを失い、私のために命を失う者は、それを得る。26たとえ人が全世界を手に入れても、自分の命を損なうなら、何の得があるか。人はどんな代価を払って、その命を買い戻すことができようか。27人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、その時、それぞれの行いに応じて報いるのである。28よく言うておく。ここに立っている人々の中には、人の子が御国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・3月7日「受難節第3主日」の日課主題は「受難の予告」。各福音書は、主イエス自身の「受難予告」を複数の場面に置いて伝えているが、もっともまとまりがあり、共観福音書が共通の逸話として伝えているのが、日課箇所となっている場面で、「ペトロの信仰告白」および「弟子たちへの随従の呼びかけ」とセットとなっている。

・旧約正典の中でも「諸書」に区分される諸文書には、「神に従う者の苦難の意味」を問うことが主題となっている例が少なくない。単純素朴には、「苦難は人の罪の結果であって、神に従う者は苦難を逃れることができる」という信仰理解がある。このような理解は、因果応報に基づく希望的推測に基づいており、宗教的倫理規範の根拠として平易であり、一般に受け入れられやすいものである。しかし、現実に行っていることを観察するとき、因果応報的な評価では納得できない不条理が少なくないことに気づかされる。「コヘレトの言葉」や「ヨブ記」など、「諸書」の中でも「知恵文学」と呼ばれる文書は、このような不条理を観察し、それでもなお因果応報的な見方が可能なのか、それとも別の視点が求められているのかを問うものとなっている。それに対する解は、大まかに言って二つ、個人に焦点を当てるものと、共同体(社会)に焦点を当てるものとして示されるだろう。「ヨブ記」などは、個人に焦点を当て、「苦難は、神が人の信仰を試し、鍛えるために与えられるもの」と捉える。一方、「第二イザヤ」に描かれる「苦難の僕」などによって示されるのが、共同体に焦点を当てた理解で、「苦難は、神が他の人びとを回復・救済するために犠牲として用いられる者に与えられるもの」と捉える。前者(個人に焦点)は、広く一般化しやすい見方であるが、後者(共同体に焦点)は、犠牲となる者が神の意志に従順であることなど特殊な条件を満たした場合にのみ成り立つ視点である。

旧約日課(ヨブ1章より)

・「ヨブ記」は、旧約(ユダヤ教)正典中の「諸書」に区分される文書で、バビロン捕囚以後の時代に「義人ヨブの伝承物語」(1~2章および42:7以下)と「ヨブと友人らおよび神との対話篇」(3章~42:6)が組み合わされて現在の構成に編集編纂されたと考えられている。「義人ヨブの伝承物語」は、イスラエル社会にとっては古い遊牧生活時代を背景としており、古代オリエント世界に共通のルーツをもつ神義論的テーマの物語のヘブライ語版であろうとされている。

・日課箇所は、「ヨブ記」冒頭部分。

・本書編纂時には、「ヨブ」の人物像について、「ノア」「ダニエル」と並んで伝説的な「義人」という認識が共有されていたと考えられる(エゼキエル14:14、同20)。「ヨブ記」自体は、「ヨブ」の人物像を、1:1(また1:8)

「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きて」いた者と描写する。ただし、ここで「無垢」と訳されている語(ターム)は、「純粹・無欲・汚れない」という意味ではなく「完全」という語義。「無垢な正しい人」というのは「為すべきことは完全に果たしていた落ち度のない人」というニュアンス。そうであればこそ、5節の息子たちのために犠牲をささげていた理由につながる。

・「ヨブ物語」では、「サタン(サータン)」が「神の使いたち」と並んで登場し、主の配下の者として振る舞っている。旧約で「サータン」は、「妨げる者」(民22:22,32など)、「敵対する者」(王上11:14,23,25など)等の訳語で出てくる。特に「民数記」22章の「妨げる者」は、明らかに「主の御使い」の一形態として描かれており、「ヨブ物語」の「サタン」と同じ位置づけにある。また、「ゼカリヤ書」3:1,2には大祭司ヨシュアを主の御使いの前で訴える「サータン」が描かれるが、これも、あくまで主の支配下に置かれた存在である。これに対して新約で描かれる「サタン」や「悪魔」がしばしば神と完全に敵対しうる勢力として描かれるのは、旧約とは異なる東方(ペルシャ、バビロニアなど)宗教にルーツを持つ「二元論的世界観(善神と悪神の対立構図)」の影響を受けるようになって後のことである。

使徒書日課(1ペトロ4章より)

・「ペトロの手紙一」は、使徒ペトロの名によってアナトリア半島諸地域の教会に宛てて記された書簡であるが、より一般的にすべてのキリスト信者に向けて教えられた内容であることから「共同書簡」の一つと呼ばれる。ペトロの真筆性を疑問視する見方も多いが、そもそも、5:12にも明示されているように、当時の書簡等文書は、差出人本人が筆を持って記すとは限らず、多くの場合は専門の代書業者か一定の文書作成スキルを持った人(本書簡の場合は「シルワノ」の名が挙げられている)に依頼して、口述筆記や要約筆記によって作成された(パウロ書簡でさえ、ほとんどがそのような方法で作成されている)。そこで、学術的な研究結果として執筆者の真正性を問題にしても常に仮説に仮説を重ねた議論にしかならず、むしろ、1~2世紀の教会において本書簡が「使徒ペトロ」の名によって受け入れられ、この書簡の内容が「ペトロの教え」として承認されてきたということが本質的に重要となる。

・本書簡は、キリストに従う信仰者の自己理解(アイデンティティ)が明確にされることを目的として記されている。ペトロは、キリスト者が「神に選ばれた民」であり、神の御業を広く伝えるために選ばれたこと(2章)、キリストが苦しみを受けられたことにより自分たちが救われて選ばれた民として生きるようにされたのであるから、自分たちもキリストと共に苦しみを引き受ける生き方へと促されており、キリスト者の苦しみが他の人びとの救いのために用いられていくであろうことを示す(3章)。日課箇所(4章)は、以上のことを踏まえて、この生き方に留まり続けることを勧めている。

福音書日課(マタイ 16 章より)

・日課箇所は、「ペトロの信仰告白」「主イエスの受難予告」「弟子たちへの随順の勧め」が続く逸話で、後に続く「イエスの山上の変貌」「悪霊に取りつかれた子を癒す」「二度目の受難予告」まで一連の構成が共観福音書で崩されることなく伝えられている。おそらく、「受難物語」伝承と対になる「受難予告物語」伝承として初期の使徒たちによって共有されていたものであろう。ただし、共観福音書各書は、細部で改変を行い、それぞれの視点を強調している。

・日課箇所を「マルコ福音書」および「ルカ福音書」と比較するとき、「マタイ福音書」の独自性は、17~19 節と 27 節にあることがわかる。

・前者(17~19 節)は、ペトロの信仰告白(16 節)を受けて、主イエスが「ペトロ=岩」たる弟子を基礎として地上の「教会」を建てられるという宣言である。四福音書中で「教会(エクレシア)」の語が用いられるのは「マタイ」だけで、この箇所(16:18)と 18:17 の二例のみである。「マタイ」は、弟子たちの教会の基礎が主イエスによってすでに据えられていたという視点で物語っており、「ルカ」が想定するような復活・昇天後の「聖霊降臨」を必須と考えていない。それは、「ルカ」が「聖霊降臨」を共同体的に捉えているのに対して、「マタイ」は「洗礼」に伴う個々の信仰者に起こることとして捉えているからであろう。そうであればこそ、「マタイ」は、「教会」という共同体を基礎づけるものとして「弟子」たる「ペトロ」を明示し、そこに主イエスの権威授与を見るのであろう。

・後者(27 節)は、「マルコ」や「ルカ」が主イエスを拒絶する者の排除を警告しているのに対して置き換えた句で、排除の視点を緩和して「すべての者の(地上の教会における暫定的な)包括・受容」という「マタイ」の強調する思想に置き換えている。

・23 節「サタン、引き下がれ(ヒュパ・ゲ・オピソ・ムー・サターナ)」は、4:10「退け、サタン(ヒュパ・ゲ・サターナ)」と同じ。

来週の誕生日 (3月7日~13日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-292 番「勝利をたたえて」(= II 90 番)は、6 世紀ポワティエの修道院司教ヴェナンティウス・フォルトゥナートゥスが「聖なる十字架に敬意を表し」と題して作詞したラテン語聖歌で、伝統的に受難週に歌われてきた。

・21-486 番「飢えている人と」は、1977 年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。

・21-291 番「み神の座を捨て」は、4 世紀シリアのエフラムが作詞したシリア語聖歌集が原作で、米国の神学教授ライズが英訳したものの中からタッカーが讃美歌用に歌詞を整え、1982 年出版の讃美歌集に収録。曲は、ロンドン生まれで米国で広く活躍した音楽家アーナットによる。

21-292「勝利をたたえて」**Pange Lingua Gloriosi****ENGLISH Version-**

1. Sing, my tongue, the Savior's glory, / Of his flesh the myst'ry sing; / Of the Blood, all price exceeding, / Shed by our immortal King, / Destined, for the world's redemption, / from a noble womb to spring.
2. Of a pure and spotless virgin / Born for us on earth below, / He, as man, with us conversing, / Stayed, the seeds of truth to sow; / Then he closed in solemn order / Wondrously his life of woe.
3. On the night of that last supper, / Seated with his chosen band, / He, the Paschal victim eating, / First fulfills the Law's command; / Then as food, to the disciples / Gives himself with his own hand.
4. Word made flesh, the bread of nature / By his word to flesh he turns; / Wine into his blood he changes, / What though sense no change discerns? / Only be the heart in earnest, / Faith its lesson quickly learns.
5. Down in adoration falling, / This great sacrament we hail; / Over ancient forms of worship / Newer rites of grace prevail; / Faith tells us that Christ is present, / When our human senses fail.
6. To the everlasting Father, / And the Son who made us free, / And the Spirit, God proceeding / From them Each eternally, / Be salvation, honor, blessing, / Might and endless majesty.

21-486「飢えている人と」**Brich mit den Hungrigen dein Brot**

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

21-291「み神の座を捨て」**From God Christ's deity came forth**

1. From God Christ's deity came forth, / his manhood from humanity; / his priesthood from Melchizedek, / his royalty from David's tree: / praised be his Oneness.
2. He joined with guests at wedding feast, / yet in the wilderness did fast; / he taught within the temple's gates; / his people saw him die at last: / praised be his teaching.
3. The dissolute he did not scorn, / nor turn from those who were in sin; / he for the righteous did rejoice / but bade the fallen to come in: / praised be his mercy.
4. He did not disregard the sick; / to simple ones his word was given; / and he descended to the earth / and, his work done, went up to heaven: / praised be his coming.
5. Who then, my Lord, compares to you? / The Watcher slept, the Great was small, / the Pure baptized, the Life who died, / the King abased to honor all: / praised be your glory.